

平成 30 年度共通教育アンケート（1 年次生対象） 実施報告書

大学教育センター

全学共通教育部門長 大塚 豊

1. アンケートに対する学生の取り組みと周知方法について

・平成 30 年度の学生対象の共通教育アンケート調査は、共通教育を中心とした学修についての、自由記述を含む 41 項目の設問により、当初平成 31 年 1 月 7 日（月）～2 月 28 日（木）の予定で実施した。しかし、最終日間近の 2 月 27 日になっても全学の平均回答率が 45%と低調であったため、3 月末まで実施期間を延長した。その結果、最終的には 53%まで上昇した。これは前々回平成 28 年度の回答率 49.9%よりも高いものの、前回平成 29 年度調査の回答率 56.8%に比べて低下しており、6 割に満たないという低調さである。いっそうの改善を図る必要がある。学科毎の回答率を見ると、薬学科 89%、生命栄養科学科 88%のように高い学科がある一方、経済学科 18%、情報工学科 18%、海洋生物学科 34%、国際経済学科 39%のように尚改善の余地のある学科がある。薬学部は昨年度に続いて高い回答率が見られたが、経済学部回答率の低さが目立っている。次年度以降、回答率の低かった学部・学科、とくに毎年のように回答率の低い学科を中心に、アンケートの実施に関してより徹底した周知活動を行うことが望まれる。

2. 所属学部・学科のカリキュラム理解度および大学教育センターの学修支援体制理解度

・所属する学部・学科のカリキュラムマップについて、13.4%の学生（昨年度は 12.6%。以下括弧内の数字は比較対象のための昨年度の数値）は「よく理解している」、45.0%は「だいたい理解している」と回答している。薬学部の回答者のうち 11.8%が「まったく知らない」と答えており、昨年度も 8.3%と高く、「まったく理解できていない」とした者も 4.2%であり、他学部比べて際だって高い比率の学生が自らの学部・学科のカリキュラムマップについて認知度、理解度が低い。カリキュラムの構成についての学生への説明がどれほど丁寧に行われたか疑問を感じざるを得ない。同様に、情報工学科では、22.2%が「まったく知らない」と答え、機械工学科でも、「まったく理解できていない」9.1%、「聞いた（見た）ことがある」13.6%、「まったく知らない」4.5%と、他学科に比べて理解度が低い。

・次に、大学教育センターが行っている各種の学修支援については、「まったく知らない」と回答した学生の割合が、昨年度は 15.39%と比較的低かったが、今年度は 35.5%の高率を示した。学修支援相談室、e ラーニング・システム、数学基礎力 UP 講座に関する認知度はそれぞれ、前回調査の 32.3%、22.9%、29.6%に比べて今回は 27.5%、13.3%、23.6%といずれも低下した。数学基礎力 UP 講座については、利用してきた公文式教材に対する各学科からの評価が芳しく無かったことと、継続提供への強い要望が見られなかったことから、2019 年度からは開講を一旦停止した。これに代わって、パーソナルな指導を受けられるように指導時間の延長の措置を講じるようになっており、その効果に期待したい。

・e ラーニング教材のうち物理・科学の使用頻度が低く、2019 年度には英語教材は引き続き学内外で利用できるものの、物理、科学については取りやめることになった。このように、e ラーニング・システムについての認知度や利用度は高いとは言えないが、利用した学生による感想を自由記述に見てみると、「場所を選ばず利用できて便利」「自宅で自分の速度で勉強できる」など、評価されていることが分かる。しかし、一方で「読み込み時間があってス

ムーズに問題を解けない」といった、使いづらさの指摘も見られる。ソフトの内容精選の努力が引き続き必要であろう。

・学修支援相談室を「まったく利用したことがない」と答えた学生が 85.7%と、高い数値である。一方、高校までの科目を復習する授業すなわちリメディアル教育の必要性については、「必要である」が 40.1%、「まあまあ必要である」と回答した学生の割合は 37.6%で、これらを合算すると、77.7%もの高い割合の学生がリメディアル教育に対する必要性を感じており、学修支援相談室が役立つ余地は十分にあるのである。学修支援相談室をまったく利用したことがない学生に、その理由を尋ねたところ、「利用する必要がない」の選択肢を選んだ学生が 33.2%で昨年度の 29.5%より上昇し、これに次いで「場所が分からない」28.4%、「時間が合わない」18.3%となっている。自由記述意見にも「相談室があることを知らなかった」との意見が見られ、新入生のオリエンテーションに際して、各学科が学修支援相談室を学内施設の見学に組み入れるなどの措置を講じることが望まれる。全体として、学修支援体制についての情報が学生に浸透していないことを示している。

・高校までの科目を復習する授業の必要性に関連して、どの科目のリメディアル教育が必要かを尋ねたところ、英語は、全学において、数学の 19.1%を超え、23.7%でトップである。それ以外では化学、生物、物理が 10 数%ずつの回答であった。学生が最も復習と必要とすると考えている英語については、経済学部、人間文化学部、生命工学部が特にその必要性を高く感じている。ちなみに、文科省は高校を卒業する段階でヨーロッパ語学習得規準・セファールの B1 レベルを要求しているが、本学の学生の英語入試の結果からすると、そのレベルに達する状態からは遠く、入試の多様性とも相俟って、中学校から高校 1 年レベルの学力状況の学生が多数見られる。入学直後に行う英語プレイスメント・テストにおいても、英語力に弱点のある学生が多く見出されている。担当教員は教材をやさしくしたり、教え方を対話的にして興味をもたせるよう苦心したり、再履修クラスを設定したりして、こうした復習的な指導を実践している。但し、大学での英語教育であるので単に中学、高校での学習を繰り返すのではなく、大学生として楽しめる、また発見のあるように教材及び指導法を採り入れるように工夫している。

3. 共通教育全体について

・「共通教育科目で充実していると思われる科目群」は何かという設問では、昨年度までトップであった教養ゼミ (15.1%) を抜いて、情報リテラシーが 21.2%と、最も多くの学生によって選択された。とくに薬学部が 27.6%、工学部が 21.8%と、高い比率を示している。英語はこれらに次いで 3 番目 (12.7%) に充実していると評価されている。日本語表現は 12.6%で 4 番目であり、英語と小差で評価されている。同じ語学でも初修外国語が 5.8%にとどまっており、その原因を調査するとともに速やかに対応措置を講ずる必要がある。教養科目群が充実していたとする者が軒並み数%にとどまる中で、D 群の「思索と創造」は 11.6%と健闘している。

・「入学当初、共通教育に期待していたこと」は何かという設問では、上位から「専門での勉強の基礎」19.7%、「専門以外の幅広い知識・教養」15.7%、「実用的な知識・技能」15.4%、「学生同士の交流」13.4%等の順になっており、前年度調査結果と同じ順位であった。これらの「期待内容に関して、どれほどの期待達成度あるいは満足度が得られたか」を%で回答することを求めたところ、満足度 70%以上と回答した学生が最も多く、その割合は 12.6%である。また、満足度 100%~70%の学生が全体の 29.5%を占めた。この数値は昨年度の 24.4%に比べて、5 ポイントも高くなっている。

・上述したとおり、共通教育科目群の中で教養ゼミは情報処理リテラシーに次いで充実して

いるとの回答であったが、初年次教育科目として開設されている教養ゼミを履修して良かった点については、上位から「高校生活（学習）から大学生活（学修）へスムーズに移行できた」19.6%（昨年度は22.8%）、「大学生としての学修スキルが身についた」12.7%（昨年度は11.6%）、「コミュニケーション能力が向上した」12.2%（昨年度は10.7%）等の順になっており、この順位は昨年度と同じであった。一方、教養ゼミの改善点については、「特に改善点はない」という回答が45.0%と最も高い比率であるが、これに次いで「授業の進め方をもっと工夫して欲しい」8.2%、「学生の予備知識や理解度をもっと考慮して欲しい」と「コミュニケーションの場をもっと欲しい」がともに7.7%の学生から要望されている。教養ゼミの内容と授業の進め方について、「学生の関心に対応する授業内容にして欲しい」に関して、生物工学科では35.0%、国際経済学科では30.0%と多くの学生からの要望がだされている。内容の改善が図られてもよからう。

・本学で創設以来続いている教養講座に関しては、「幅広い教養が身についた」29.6%（昨年度は24.5%）、「知的好奇心をくすぐった」17.4%（昨年度は23.1%）、「芸術・文化にも触れられてよかった」15.9%（昨年度は20.0%）等のポジティブな回答の比率の高さが目につくが、一方で「あまり興味の持てないような内容が多かった」12.4%、「難しい内容が多かった」11.8%（昨年度は8.5%）、あまり興味が持てないような内容が多かった」13.2%というネガティブな回答の比率にも注意すべきである。

4. 語学・リテラシー科目について

日本語表現法については、「とても満足した」と「ある程度満足した」を合わせると68%となり、概ね良しとしてよいかと思われる。但し、「まったく不満だった」も2.9%であるので、難易度の焦点合わせがさらに課題であろうか。日本語表現法に関しては、「今の程度の時間数と内容でよい」以上が74.8%である。これを裏から読めば、もうこれ以上は結構、ということであるのか。一方で内容に不満がある者も約20%はいる。これは、設問18の満足度への回答とも関連する。日本語表現法の授業で良かった点を尋ねたのに対して、「日本語の基礎力が向上した」30.7%はシラバスで謳っている前半の目標、「文章表現力が向上した」と「レポート作成に役立つ」を合わせた42.6%は後半の目標に相当するところである。こうしてみると、授業の目標は概ね達成されていると見ることが出来る。但しこれはあくまで、アンケート回答の際の学生の意識においてのことである。日本語表現法に関する設問18～20への回答では、学科間の違いがあるが、その要因としては、集団意識なのか、担当者の違いなのか、検討が必要となる。

情報リテラシーは、上述したとおり、共通教育科目で充実していると思われる科目群の第1位の評価を得た。第2位の初年次教育科目(教養ゼミ)より50人もの多くが選らんでおり、本学の情報リテラシー教育は、その充実度に関して高評価を得ていると言えよう。本学の情報リテラシー科目は、1年生を対象とした科目で、高校で学んだ情報科目についての復習と大学教育で必要な最低限のスキルを学ぶ高大接続の要素をもっている。本科目は、本学へ入学した学生の学修レベルに合致し高い満足度を実現しており、高大接続のための科目として適切であると考えられる。また、「充実度、満足度、難易度」全ての項目で共通教育5科目中最も高い評価を得たことから、「最も充実度が高く、最も満足度が高く、最も難易の適切性が高い」と3拍子揃った、本学の学生に対して適切な授業科目であると言える。

・英語については、全学において、とても満足した(30.5%)、ある程度満足した(46.0%)で、76.5%が満足感を積極的に示している。薬学部においては、とても満足した(43.7%)、

ある程度満足した(35.3%)で、他学部を満足度において圧倒している。学部を通して全体的に満足度が高いことは、英語教育における新カリキュラムが一定の成果をもたらしたと評価できる。但し、高い満足度はあくまでも情意的な評価である。教材の難易度、教員の教え方、単位の取り易さなど、複合的な問題もはらんでおり、安易に取れない点も否めない。学生がどのような力、英語学力、集中力、こつこつと努力する力などをどのように伸ばしかを、明確に捉える評価法の開発が望まれる。

全学において、「今以上に時間数や高度な内容が必要」とした学生は 15.1%、「今の程度の時間数や内容でよい」が 68.3%である。薬学部が今よりも少ない時間数や内容でよいが「20.2%」と高率であるのは、満足度に対する回答と矛盾しかねない反応であり、どのような事情があるのか検討する必要がある。

教材の難易度は、各教育が本学の学生の英語習得段階を踏まえた上で選んでいると評価できる。現状週一回の授業時間を増やす、教材難易度を上げを求めている学生は 15.1%であるので、英語を苦手とする学生の学修ケアだけでなく、英語を得意とする学生、より高度な英語を学びたい学生に対するケアも十分に配慮せねばならないであろう。面倒見のよい指導を行っていくには、スタッフの充実を含めて学習ケアのいっそうの充実が図られねばならないであろう。

また、英語科目の良かった点については、全学において、「英語の能力(辞書があれば英文を読める力等)が向上した」が 20.3%、「英語を学習する楽しさを実感した」が 18.4%、「コミュニケーション能力が向上した」が 11.6%であった。大学での英語教育を単に中学・高校の英語の学び直しではなく、大学的な観点から、学生が新鮮な教材を通して感性と知性を広げ、深めていくような、教育に取り組んできた成果が出てきたと喜ぶたい。新カリキュラムの導入で目指していたことが実現しつつあると言ってもよいかもしれない。

回答を学部別に見ると、どの学部もほぼ似通った回答状況であるが、薬学部では「英語を学習する楽しさを実感した」が 23.9%であり、「英語の能力(辞書があれば英文を読める力等)が向上した」の比率 17.0%を上回った。時間数や難易度を尋ねた設問での回答と矛盾しているようでもあり、これについても要検討である。

次に、英語の「能力別クラス編成が適切であった」が 10.9%で4番目に多く、この編成は学生の立場からみても、適切なものとして定着してきているものと考えてよさそう。

「学習支援体制(自習や補習等)が整備されていた」については、この選択肢を選んだ者は 1.4%で、その注目度が低いことがわかった。TOEIC 入門や入門英文法などの e ラーニング、また学習支援日を設定した指導体制をとっているが、それを学生が十分に活用していないことが判明した。コンテンツの準備にもかかわらず、その学生への情宣活動が依然として不十分であることが考えられ、さらに周知を図り活用を促す必要がある。「専門に役立つ」を選択した者は全学で 8.1%にとどまり、学部によってこの数値に大差はない。共通教育の専門教育への接続の観点から見ると、その関係性が学生には十分に感じられていないことが分かった。薬学部は 9.2%、人間文化学部 10.3%であるのに対して、工学部は 5.9%である。学部によって接続の問題に温度差があることがわかった。大学教育センターの教員の意図だけでは容易に進まない接続の問題が浮き彫りになったと言ってもよい。「実力を伸ばせる科目が用意されていた」については、全学平均は 10.9%で、これも十分に対応できているとは言い難い。学生の実力をスムーズに伸ばせるように、クラス編成の仕方についても再検討が必要であろう。単純に上から点数ごとにクラス編成をしていくというのも一案であろう。

・「初修外国語」のどの語種を自らが選択したかについて設問に関して回答しなかった学生が回答者総数 476 人中 160 人の多数にのぼったのは奇妙であったが、回答者の中では、52.7%が中国語、24.6%がドイツ語、16.4%がフランス語、6.3%が韓国語を履修したと答えている。

韓国語は平成 30 年度から新たに加わったものであるが、これら初修外国語 4 言語の学修

に関して、「とても満足した」は 23.1%、「ある程度満足した」は 49.1%と比較的高い比率を示し、「あまり満足しなかった」5.2%、「まったく不満だった」1.2%を大きく上回り、とくに昨年度の「まったく不満だった」4.5%よりも数%低下したことは喜ばしい。授業の時間数と難易度についても、70.7%の学生が「今の程度の時間数や内容でよい」と回答している。「初修外国語の良かった点」については、「初修外国語を学習する楽しさを実感した」が 44.6（昨年度は 27.2%）と最も高い割合であり、次いで「初修外国語の能力（辞書があれば原文を読める能力等）が向上した」が 19.6%（昨年度は 19.0%）と上昇した他、「専門の勉強に役立つ」11.6%、「異文化の理解が深まった」11.5%などを選択した学生もいる。

5. 教養教育科目について

・教養教育科目（A～F 群）総体として見た授業時間数と内容については、「今の程度の時間数や内容でよい」と回答した学生の割合 76.5%（昨年度は 78.8%）は昨年度の 81.7%より下がり、逆に「今以上に時間数や高度な内容が必要」が昨年度の 7.9%から 9.0%へ上昇し、知的関心が高まってきたと読めなくもない。

・教養教育科目履修の際に特に重視した点については、上位から「知的好奇心を満たす」38.6%（昨年度は 33.9%）、「資格取得」22.2%（昨年度は 22.3%）、基礎学力の向上」20.1%（昨年度は 20.9%）等の順になっている。この順位は昨年度と同様である。教養教育科目を履修した結果、良かった点については、上位から「幅広い教養が身についた」33.8%（昨年度は 29.7%）、「知的好奇心を満たした」24.4%（昨年度は 24.8%）、「基礎学力が向上した」13.4%（昨年度は 14.4%）等の順になっており、「幅広い教養が身についた」の数値がかなり上昇した以外、この設問に対する回答の傾向や数値も昨年度とほぼ同様である。

6. キャリア教育（1年次履修のキャリアデザインⅠ）について

・「キャリアデザインⅠを受講して将来役立つ力が身に付いたと思いますか？」と、この科目に対する満足度を尋ねたところ、「とても満足した」の全学平均値が、昨年度の 13.8%から 23.5%と大幅に上昇した。全学部で数値が向上したが、特に薬学部と生命工学部ではそれぞれ 10%以上の上昇が見られた（対前年比で薬学部は 16.9 ポイント、生命工学部は 14.0 ポイント上昇）。全体的な満足度については数値上年々向上しているように見られるが、どのような改善に対する効果なのか、何に対する満足なのかを各担当教員が理解し、更なる充実につなげていく必要がある。

・キャリアデザインⅠの時間数と難易度について過去 3 年間の全学部平均を比較して見ると「今よりも少ない時間や内容で良い」（23.3%→20.3%→18.3%）、「まったく必要性を感じない」（12.7%→9.9%→6.7%）の割合が年々減少している。改善の傾向と見ることができるが、他の共通教育科目の平均と比べるとまだ高いので、更なる授業改善に加え、キャリア教育の意義についての学生への啓発を進めていくことが肝要と思われる。

・キャリアデザインⅠを履修して良かった点については、全体的には昨年度からの大きな変化は見られない。良かった点として挙げられている上位 3 項目は「自己分析ができた」（27.9%）「社会人基礎力が身についた」（14.1%）「将来の目標ができた」（12.8%）である。が、キャリアデザインⅠの授業で実践しているペアワークおよび課題とも繋がりのある「コミュニケーション能力が向上した」（7.6%）「自己管理能力が身についた」（6.0%）は依然として限られた数の学生しか選択していないことから、さらに高評価となるよういっそうの取り組みが期待される。なお、自由記述意見の中には、「教養ゼミとキャリアデザインの違

いがわからない(薬学部)」というものが見られた。

7. 学生の学修意欲について

・本年度1年次生における学修意欲についての質問項目では、入学時に「非常に意欲あり」31.7%（昨年度は28.6%）、「まあまあ意欲あり」47.5%（昨年度は54.0%）と自己分析している。この数値は前期終了時にそれぞれ21.0%（昨年度は19.1%）、55.7%（昨年度は58.0%）であり、さらに学年末に当たる今回の調査実施時には24.6%（昨年度は21.1%）、53.4%（昨年度は56.4%）と、ほぼ昨年度と同様の状況であるが、「非常に意欲あり」の状態が維持されているように見える。一方、「あまり意欲なし」、「まったく意欲なし」と回答した学生の合計の割合は、入学当初3.8%（昨年度は3.5%）、前期終了時6.3%（昨年度は4.5%）、学年末6.9%（昨年度は3.8%）と、意欲のない状態で入学したり、意欲が減退したりする学生が増加しているように思える。これらの学修意欲を持ってない、あるいは維持できない学生層に対する取り組みは、留年や退学防止の点から喫緊の課題である。

8. アンケート調査結果を踏まえた今後の改善策

以上述べてきたアンケート調査の結果を踏まえ、また、本文ではあまり触れなかった自由記述意見にも適宜言及しながら、全学共通教育の現況と改善策について今少し述べることで、本報告の結びとしたい。

まず、全体としての回答率が52.9%と29年度(56.8%)に比べて低下し、5割を少し上回る程度にとどまった。回答率は共通教育への関心のバロメーターとも言える。薬学部が88.8%であったことは例外的で、ほぼ6割前後であり、本報告の冒頭にも述べたように、経済学部については低い回答率(27.3%)にとどまった。経済学部に猛省を促したい。大学教育センター運営委員会の委員である各学科長を通じて調査への協力を学生に呼びかけ、またゼルコバや学生への一斉メールでの回答要請以外に呼びかけを行ったにもかかわらず、この回答率は何とも遺憾である。引き続き協力要請を粘り強く続けて行くこととしたい。

大学教育センターが行っている各種の学修支援については、「まったく知らない」と回答した学生の割合が35.5%にもものぼり、認知度の低さが浮き彫りになった。昨年若干上向いたかに見えた認知度が再び低下したのである。加えて、「バイトやサークルで行ける時間がない」「余分な講座を今以上に受講する心理的余裕がない」という自由記述も見られた。本学の学生がリメディアル教育など必要としない状態であれば、何も問題はない。しかし、現実はそのようなことは関係者の共通した認識となっているはずである。新入生オリエンテーションに際して、学部・学科によっては、学内各施設への新入生の案内ルートに学修支援相談室などを組み入れるなど、関係学部・学科の協力を仰ぎ、地道な広報活動を続けていく以外にない。

「共通教育により学習意欲の向上や教養を身につけるなど良い効果がさまざまにできていると思われる。「いろいろな分野の講義があり、とても勉強になりました。」といった好意的な意見が見られた反面、「単位をとるためだけに参加している学生が目立ち、質の良い学習が出来ているとは思わなかった。「誘い科目群のうちいくつかが予想より難しくてかなり苦勞したため、もう少し専門ではない人のために難易度を改善してほしい」のような批判や要望も見られた。また、「もう少し種類を増やしても良いのではないのでしょうか」という意見は傾聴に値すると思われる。各専門学部・学科のいっそうの協力も受けながら、共通教育の内容的な拡充を図っていくことに努めたい。

以上